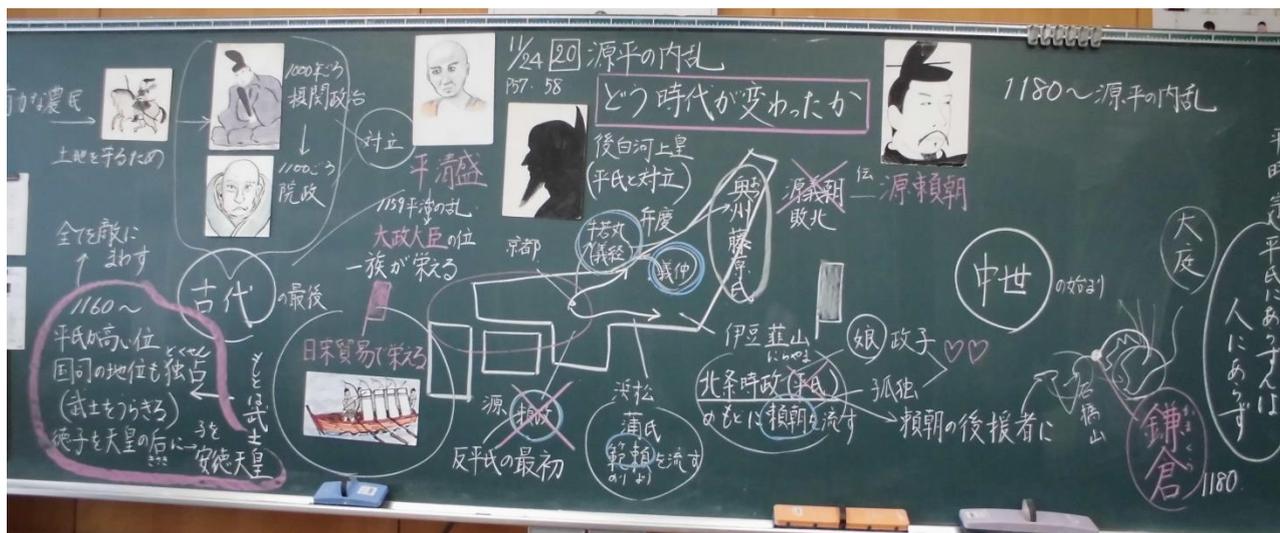


授業ノート 中世の始まり1 源平の内乱(1)

KYOICHI NOJIMA · SATURDAY, 26 NOVEMBER 2016



教師主導の授業はダメとよく言われるけれど、この部分はどう考えても教師の語りがなければおもしろくも何ともないと感じてきた。

平家物語って知ってる? 祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色盛者必衰の理を表す、おごれるものも久しからず... 知ってる生徒はいっしょに語り始める。ここから始めて、鹿ヶ谷事件から壇ノ浦まで、自分の語りの授業を続けてきた。1時間で終わらず、どうしても2時間になった。生徒が、「おもしろい!」と授業が終わって叫ぶのは、この授業だった。

ずっとそうだった。これでいいのかなあ、生徒の調べる活動がないけれど、...と疑問に思う気持ちはずっとあったが、それでも、教科書の無味乾燥の記述を見ると、語りの魅力には勝てない。なぜだろう、とずっとずっと考えてきて、35年目にして、そうかと思った。

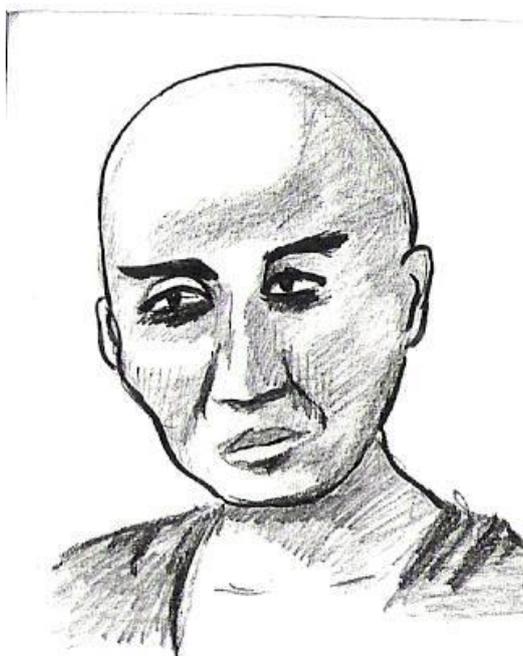
これは、「平家がたり体験」なのだ。自分が琵琶法師になって、生徒は語りに耳をそばだてる中世の民衆なのだ。決して、教師主導の引き回し授業ではなく、教師が琵琶法師になって、中世の露地に生徒を民衆としてタイムワープさせるシミュレーションアクティビティなのだ。



10年ほど前から、できるだけ古典を直接読むようにしてきた。自分の残された時間を考えると、人づての知識が嫌になっていた。直接古典を読むと、新鮮な発見があって、授業が輝く。古事記・日本書紀・今昔・信長公記... その最初が、平家物語だった。これからという若い先生に

は、他人の授業論を学ぶのもいいが、どこかで直接古典を読んでそこから授業を作る形に変えていくことをおすすめする。特に平家は文章も比較的平易で、和漢混淆文のリズム、情景描写のすばらしさなど、ぜひ肌で知って欲しい。最後の「六代最期」まで、発見の連続だった。岩波の大活字本が、一番読みやすいと思う。

で授業、古代→中世と黒板の左右に板書し、平清盛・後白河・頼朝(伝頼朝、実は頼朝でないことも押さえておく)の似顔絵カードを張る。

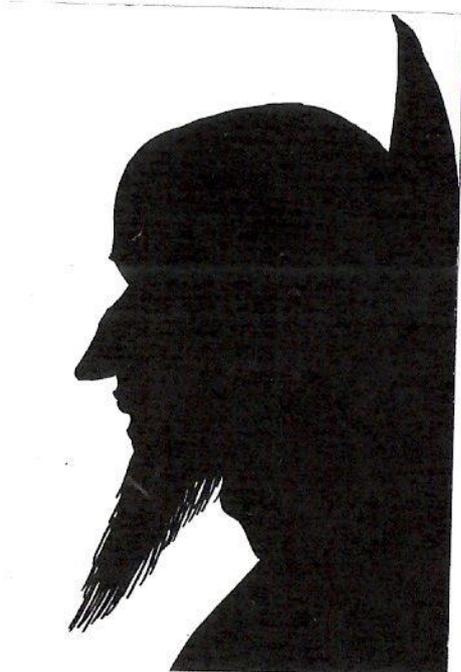


清盛は六波羅蜜寺にある清盛像をもとに、自分で描いたイラスト。若いときは、もっとイケメンでかっこよかったんだよ。これはかなり病んでからの絵だね。強烈な個性で、自己中心的で、創業者ワンマンの典型かな。

西海の貿易で巨利を得た、船の戦いが強い西日本武士の代表。

出生に疑惑があつて、忠盛の子と言うことになっているけれど白河上皇が実の父ではないか、だから出世できたのではないか、という噂が強い。

佐藤義清(後の西行)遠藤盛遠(後の文覚)などと並んで、北面の武士の若者の中でひととき目立つ侍だった。保元、平治の乱で勝ち抜き、ライバル源義朝を打倒し平家政権をつくる。



そして、次の人が2人目の主役。わざとシルエットにする。似顔絵がないわけじゃないんだけどね、あまりにも個性的な、しかもいかにも黒幕といった人なのでこうしました。

周囲の貴族の中では「これほど暗愚な帝王を知らない」という評判だった。暗愚というのは、決してバカということではなく、健全でないと言うくらいに考えた方がいい。「王家の腐敗」を絵に描いたような生き方をした人と行っていいんじゃないかな。それは、これからの

話の中で、わかってくるでしょう。平治の乱では源義朝のところから抜け出して清盛側についた。

ちなみに、遊びの天才で「梁塵微抄」の「あそびせんとやうまれけん たわぶれせんとやうまれけん あそぶこどものこえきけば わがみさえこそゆるがるれ」は有名だよ。



そして、最後にこの人。もっとも、この絵は別の人なんだけどね、あんまりこの顔が有名になっちゃったので、この顔で通ってしまっているんだよ。だから、伝源頼朝像。

幼いときに父、上の3人の兄をころされ、自分もやがて成長したら殺される身として伊豆に流され監視の下で成長した憂鬱な、厳しい顔が、この絵とあってるからじゃないかね。

話は、平治の乱で負けた源義朝の子供たちがころされるところから始まります。頼朝 12 歳、範頼、義経が清盛に殺されるところを、清盛の母が止める。「おまえに仏の心がないのか」

下の2人はともかく、12歳となればたぶん反抗的な目で清盛を見据えていたに違いない。その頼朝の顔を見ながら、清盛はやむを得ず殺すのをやめ、伊豆の蛭が小島に流す。平氏の北条時政たちが見張り、やがて成長したら切ることになっ

ていた。

さて、平氏はどんな政治をやったと思う？ 武士出身で始めて政権を作ったんだから、多くの期待と嫉妬があったことだろうね。全国の武士はどんな期待を寄せたかな？

「土地を認めて欲しい」「国司を何とかして欲しい」「武士を人として認めて欲しい」

そうだろうね。武士らしいこと何かしたのかな？ やったことを調べてみて。教科書を見ると「高位高官を独占した」「全国の国司任命権=受領国主になった。」「娘を天皇の后にして子供を天皇にした」これどう？

「藤原氏と同じ」「しかも国司も平氏」「最悪」

そういうことだね。つまり、武士の裏切り者。当然貴族からも嫉妬される。古代国家が崩壊して、たくさんの浮浪農民が都に流れ込んでいて、社会が不安定なときだった。橋の下や荒

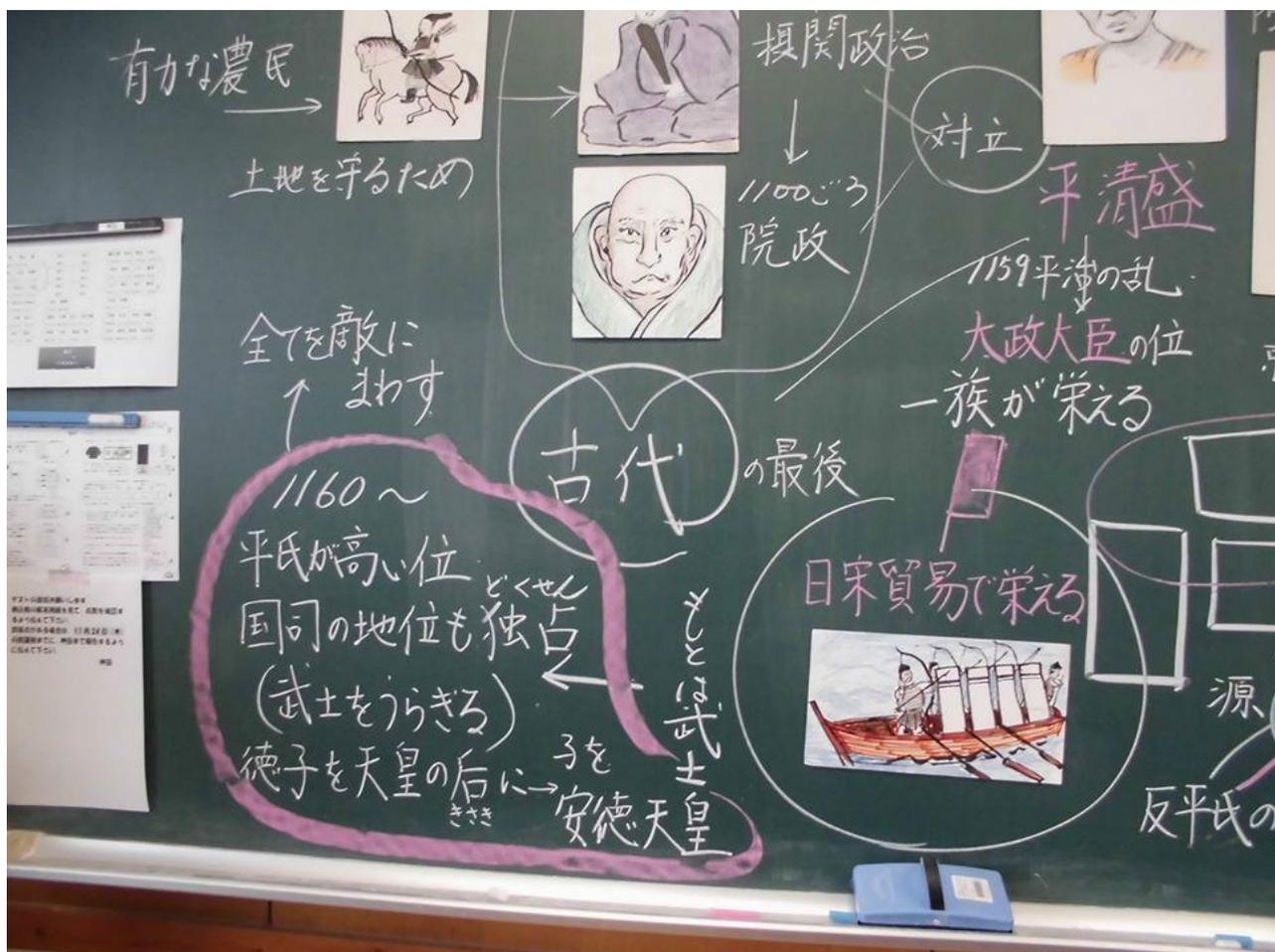
れ果てた城門にホームレスや孤児が群がっていた。強盗や人さらいが横行していた。武士の政府はそういう人からも期待されたはずなんだけど、自分たちはぜいたくの限りを尽くすんだね。「平家にあらずんば人にあらず」清盛の一族の娘を嫁にもらった平時忠が言った言葉だね。

不満の声が出るんだね。どうしたと思う？口を無理矢理封じさせるんだよ。

「ああ、知ってる。赤い服着た子供でしょ」

よく知ってるね、六波羅禿(かむろ)。浮浪児たちを六波羅の屋敷に集めて、食事と服を与え、スパイをさせる。赤い服を着せ、紙をおかっぱに切りそろえて一目でそれとわかるようにさせ町中に放す。悪口を言っているものがいたら即報告させ、騎馬部隊が当人を逮捕し、家を破却し張り紙をする。「平家の悪口を言ったものはこうなる」恐怖政治だね。

新しいことは？武士らしいことは何もしていない？



「日宋貿易、大輪田泊を作ったと書いてあるよ」

そう。平家はどんな武士だっけ。

「そうか、西日本の船の武士。貿易を国家で推奨したんだ。」その通り、平家は新しいこともちゃんとやっている。朝廷の中に入り込んで朝廷や貴族と同じ形になったけれど、貿易とか

港の修築なんてのは貴族は絶対にやらない。西日本の武士、貿易関係者は喜んだらうね。新儀の政治に反発する朝廷を押さえて都を福原に移転する大変革もやってるからね。これが保守勢力の反発を呼ぶ。表向き清盛と手を組んださる大物が、裏で平氏打倒を画策し始める。

「…後白河上皇？」そのとおり。平氏打倒の計画を極秘に始めるんだね。鹿ヶ谷陰謀事件、よっぱらって「いせのへいじはすがめなり」「どうしてくれよう」「こうしてやろうぞ」へいじ(とつくり)の首を折る…

後白河以外の関係人物は全て逮捕処刑されているけれど、後白河だけは、しらを切るんだね。そのあと、内緒の院の命令「平氏打倒」を全国に出す。もちろん自分の身代わりを立てて。以仁王(もちひとおう)の令旨(りょうじ)。遠藤盛遠という、かつて血気盛んな北面の武士だった男が、恋のもつれから好きだった女性を殺してしまい、仏門に入る。文覚上人と言います。彼が、全国を歩いて、源氏の生き残りを訪ね決起を促すんだよ。さて、この頃源氏の生き残りはどうしていたでしょう。

先ず伊豆の頼朝。一人で伊豆の山を馬に乗って歩くことが多かったようだね。みんな頼朝には距離を置く。頼朝もそれはわかっている、心を許さないんだよ。ここにもう一人、運命の女性が登場します。気が強く、美しい女性だったようだよ。北条時政の娘。時政の政をもらっているから、かわいがったんだらうね。

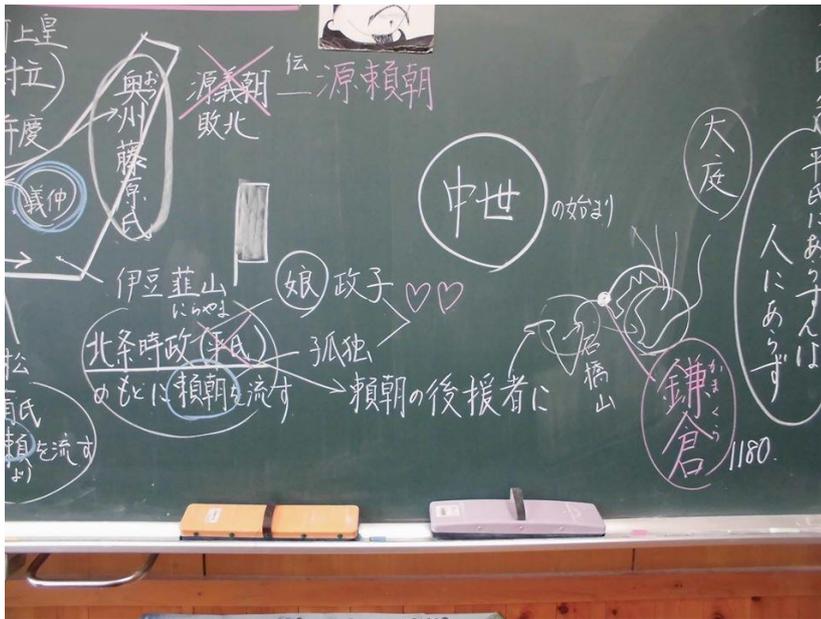
「政子！」

そうだね。お父さんももてあましていたんだらうね。早く結婚させた方がいい、許嫁を決めて結婚の話を進めていた。政子は、好きでもないのに…と乗り気ではない。でも、だからといって好きな人がいるわけでもない。やはり憂鬱だった。政子も馬に乗って伊豆の山を悶々と歩いていたのかもね。そこで二人は運命の出会いをする。たぶん、政子が一目惚れしたんでしょう。あつた瞬間目がハート。

相手は人質の、しかも成長したら殺すべき反逆者の棟梁。よりによって、何でこんな男に娘は…と時政は思っただらうね。時政は政子の人柄をよくわかっていたから、翻意させられるかどうか悩み抜いたに違いない。頼朝を殺せばおそらく政子も死ぬに違いない。みんな幸せにならない。悩み抜いた彼はどうしたと思う？

「…」

発想を転換したんだらうね。おれは何でこんなに苦しむのか。抜け出る方法はないのか。そうか、清盛の平氏の命令を聞くことが絶対と思っていたから苦しいのだ。生き方を変えてみたらどうだろう。若い二人に運命をかけてみたらどうだろう。この結婚を認めて、頼朝と政



子に新しい運命をかけてみたらどうだろう。こう言うことだったんでしょう。歴史は、こうした瞬間から自覚的に動いていきます。みんなも、発想を変えてみることは大切だよ。文覚が訪ねてきたときは、このころかな。頼朝はまだ反乱を起こす自覚はない。文覚は懐からドクロを取り出して「これはあなたの父義朝公でございます。泣いておられますぞ」と決起を進め

たという話が伝わっている。清朝で冷徹な頼朝はそう簡単には動かない。

頼朝の2人の弟、蒲の冠者範頼は浜松の蒲氏のところで成長していた。まだ子供。牛若丸は……

鞍馬寺でお寺の修行が始まった。落ち着きのない子でね、和尚さんが前を向いて、後ろを見るともういない。裏の修験道の修行の人に交じって、いたずらの限り。岩を飛び越え、猿のようにぴょんぴょん消えていく。やがて、都に出て橋の下の浮浪児たちのボスのような存在になっていたらしい。知っているでしょ、五条の橋の上で、刀狩り強盗と決闘になった話「あ、弁慶でしょう」そう。橋の欄干をぴょんぴょん跳んで弁慶をやっつけるんだね。牛若丸は、そういう、けんか上手の、ルール無視の、ヤンキーリーダー、しかも血筋のいい得体の知れない若者に成長していく。平氏が監視の手を狭めてくる。反平氏の気持ちのある人たちが救出に動く。この頃、東北地方には独立国があった。蝦夷から成長した奥州の豪族。金を産出し北方との貿易でも栄えたこの一族は自らを都の摂関家と同じ名字を名乗る。「奥州藤原氏ですね」そう。そこへ脱出するんだね。都の金を売りに来た商人ネットワークを通してらしい。途中で彼は名前を義経と改める。ここで彼は独立国奥州藤原氏の庇護の元、自由にのびのびと成長する。

岐阜の山奥、木曾には頼朝の叔父に当たる源氏がいた。木曾義仲。パートナーが巴御前という、夫婦揃ってたくましい、山の中のターザンとアマゾナスみたいな夫婦でね。二人して裸馬にまたがって狩りをするというような人たち。

そして、最後に、京都の宇治におじいちゃん源頼政がいた。若いときはヌエ退治でならした強者、宮中のおぼえも高かったんだが、保元・平治の乱でただ一人平氏側についたんだね、つまり源氏なのに平氏側、まあ一族の中の反主流、裏切り者みたいな感じだったんだね。

平氏政権の中で源氏代表として形式的には高い地位にあった。隠居して宇治の方に住んでいた。

それぞれの人たちに以仁王の令旨が届く。みんな平氏を恐れて、立ち上がらない。お互いに様子を見るんだね。そんな中で、誰もやらないならわしが・・・と立ち上がったのが誰だったと思う？

「頼朝ですか？」違うんだね。頼朝や北条氏は慎重だよ。これが、驚くなかれ、おじいちゃんの頼政だったんだね。「この老体となって思い残すことはただ一つ、源氏を裏切ったこと。全国の源氏はみな息を潜めて屈服しておる。見よ、わしが立ち上がる！老いたるわが身に残された最後の使命じゃ」と言うことなんでしょう。どうなったと思う？

清盛としては「おのれじい、源氏の生き残りのおまえに目をかけてやった恩を忘れたか、殲滅してくれるわ」と言うくらいの意気込みでしょう。数倍の大軍で宇治をおそう。頼政は・・・名乗りを上げて戦いを始めた瞬間に矢が当たって死ぬ。瞬殺瞬敗といったところかな。

「ガクッ、ですね」「これで勝っていれば格好いいのにね」

まあね、頼政にすれば負けること覚悟だったろうね。ただ大切なことは・・・

「そうか、最初に立ち上がること」そう。あのおじいちゃんが立ち上がったのに、俺たちはこれでいいのか、と言うわけ。やっぱりみんな平氏が嫌だったんだ、という声ははっきりするんだね。このあと、木曾の義仲、源頼朝が相継いで挙兵します。こうして、治承寿永の内乱、いわゆる源平の争乱が始まっていく。次はこの名場面を追って紹介するね。